

あの頃の風景

おくのほそ道 第2回

最上川舟運文化を残すまち 「大石田」

株式会社片平エンジニアリング/総務・契約部
佐藤 尚 SATO Takashi (会誌編集専門委員)



① 最上川での水泳授業の様子(1932年)

大石田町は山形県の北東に位置する尾花沢盆地内にある。尾花沢市、村上市や舟形町に隣接し、町の中央を南北に最上川が流れ、冬季には雪深い地域である。関ヶ原の戦の後、初代山形藩主となった最上義光は、内陸の山形から日本海の酒田までの最上川を、舟運に利用するための開発整備を図った。そして、三難所(現村山市)の開削や、酒田、大石田、船町(現山形市)などの港の整備や河岸の設置を行った。以来、大石田町は最上川最大の中継河岸となり、荷宿や荷蔵の建ち並ぶ川港として発展した。

最上川には大石田より上流の尾花沢盆地と山形盆地の境に、碁点、三河瀬、早房と呼ばれる三難所がある。大石田より上流の山形方面から川下りする荷物は、この三難所を避けるため羽州街道を陸送して大石田で船積みし、上り船の荷物も大石田で陸揚げするものが多かつ

たと云われている。その後、最上川上流の置賜地方と村上地方の間にあった黒滝及び五百川峡谷の開削により、置賜地方に位置する米沢からも最上川舟運を利用することが可能となったことも、大石田の発展に寄与した。

最上川の川船は、はじめは酒田商人の酒田船であったが、大石田が発達すると最上船とも呼ばれる大石田船の船(底が平たく喫水の浅い船)が現れ、江戸中期には約300艘余りで酒田船と同数に達していたと云われている。京都などからの上方商品は上り船として酒田船が積み、最上の特産物商品は下り船として大石田船が積み「片運送」という慣行が行われていた。ただし、川下りの荷でも年貢米だけは酒田船が運んだと云われている。船荷は、大石田船が紅花、青苧(麻の原料)、真綿、蠟、漆、大豆小豆などの雑穀であり、酒田船が塩、茶、砂糖、海産物、ふるて、木綿などである。1901(明治34)年



②(上) 最上川舟運の河岸の町並みが伺える大石田本町(1913年)
③(右) 道も舗装され、当時の面影を偲ばせる家が点在している現在の大石田本町



⑥(右) 船着場の石段をイメージして、瓦で仕上げた屋根に階段がある1999年の山形新幹線開業時に建てられた新駅舎
⑦(下) 1901年に建造された旧大石田駅(1981年)



④(上) 芭蕉が句を詠んだと云われている大石田河岸の船着場(1964年)
⑤(左) 1996年の環境整備により舟運当時から再現した河川堤防



⑧(左) 1930年に架橋された下路カレンレバートラスとなる現在の大石田大橋
⑨(下) 1901年に架橋された木橋の旧大石田大橋(1924年)



に大石田まで鉄道が開通し、大正時代に陸羽西線が全通すると、最上川の舟運は幕を閉じることとなった。

最上川の舟運は物質交易だけではなく、上方文化などの伝播交流としても大きな役割を果たした。1689(元禄2)年、松尾芭蕉が大石田を訪れたとき、地元の俳人である船持荷物屋のあるじ高野一栄や大庄屋の高桑川水らから歓待を受け、一栄宅に3泊している。その際に芭蕉は地元俳人へのもてなしに対して、謝辞の句『五月雨をあつめて涼し最上川』を詠んだと云われている。しかし最上川を下り、川面の濁流渦巻く様子から「涼し」を「早し」に改案し、『五月雨をあつめて早し最上川』となったようである。

そのおもてなしを引き継ぐ文化として「大石田そば」がある。地元で育てた玄そばを大切な客人に対して「挽きたて」「打ちたて」「茹でたて」で蕎麦をもてなす慣習が今

でも続いている。このような土地の風土が、2001年に「大石田町そばの里」として環境省の「かおり風景100選」に選ばれている。

現在、最上川に架かる大石田大橋付近の堤防では、白壁や堀蔵や船役所等への出入り口であった大門を再現し、舟運文化が華やかだったころの面影を偲ばせている。

- <参考文献>
- 1) [写真でみる大石田のあゆみ]大石田町 昭和61年
 - 2) 「最上川と羽州浜街道」横浜昭男 吉川弘文館 2001.6.1
 - 3) 「最上川舟運と山形文化」横山昭男 東北出版企画 2006.11
 - 4) 「大石田町ホームページ」(<http://www.town.oishida.yamagata.jp/index.html>)

<取材協力>
大石田町産業振興課

<写真提供>
「写真でみる大石田のあゆみ」より
写真①高桑喜之助、写真②④⑦大石田町、写真⑨戸田良男、他は筆者